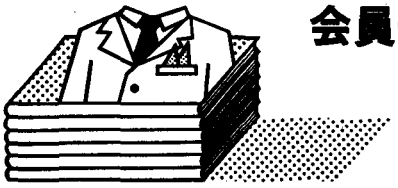

会員近況

文部省統計数理研究所　予測制御研究系　土谷　隆

この3月に東京大学計数工学科伊理研究室での2年間の修士課程を修了し，現在は上記研究系の数値的最適化研究部門（田辺國士教授）の助手として，統計におけるモデリングの技術，密度関数やハザードレートの推定法，最適化計算などの研究を行なっています．まだ，今まであまり馴染みのなかった統計という分野を“研究している”というよりは“勉強している”という感じですが，研究室の方針は「現象のモデリングに特に力を入れてデータを解析して本質に迫る」ということで，その問題意識においてはORとも共通なものがあるのではないかと考えています．また，研究所は国立大学共同利用機関としてさまざまな機関と共同研究を行なっており，私も予測制御研究系の一員として，いくつかのダムを含む水系の最適制御や長期天気予報に関する共同研究に参加しています．7月に開かれた共同研究集会「グラフ理論の数値計算への応用」でも若干のお手伝いをさせていただきました．皆様のご協力を得て，このような共同研究も活発に進めていきたいと思っております．

正直に申しまして，“ORはともすると工学のもつ非人間的側面を反映してしまいがちなのではないか”と考えており，“駆け出し”ながらも研究者としてはそのような点を常に反省しつつやっていければと考えております．これからもよろしくお願いいたします．

近畿大学　商経学部　林　芳男

小説の作法に2種類あるのだそうである．1つは，現実に起こった事件をモデルとしておもしろおかしく物語を構成していく方法；もう1つは，(現実にあり得そうならば）虚の出来事でもよい，とにかく興しろい話であればよいという立場である．

ORを，自分の進むべき道であると学生時代に決心した．ORは現実の経営問題を扱う学問であると思っている．とは言っても，現実の経営問題の一部を見たり聞いたりすることはあっても，学問をする立場では，なかなか経験しにくい．しかし，そこから発生する（数学）モデルを解ける能力は養っておかねばならないと考え，ひたすら数学的方法を中心に勉強してきた．そうこうするうちに現実にORを実践した経験もないままに人を教育する立場になってしまった．現実の問題でなくてもかまわない．現実にあり得そうな問題ならばそれも分析してOR理論を組み立てよう．世の中には探偵小説を読んで犯罪を計画し実行する不届き者がいる．興しろいORの理論を作りあげておけば，いつか実践する機会もくるだろうし，心得者は応用してしまうことだろう．とは言っても，学問としての質を落とさないためにも，また現実離れしないためにも，品質算理の運動と同様に草の根活動をし，現場の問題にいつも注意を向けておく必要がある，と考えている．

日本ユニバック(株)　応用ソフトウェア1部　保科　剛

入社以来5年間，数理計画関連のシステム開発に従事してきましたが，この春から筑波の通産省工業技術院電子技術総合研究所で1年間お世話になることになりました．こちらでは言語処理技術，ユーザー・インターフェース技術を研究テーマに技術指導を受けています．

計算機が広く普及し大衆化してきた現在，そのユーザー・インターフェースは重要な研究課題となってきています．なぜなら，より多くの人たちが計算機あるいはソフトウェアに接するようになるにつれ，より親しみやすい・より使いやすいユーザー・インターフェースが必要になってきたからです．

ところが，現在市場に出回っているOR関連のソフトウェアを観てみると，このことに十分配慮しているとはとても考えられません．計算機の進歩とともに発展したORも，最近その進歩から取り残され気味です．

ORの研究を理論・アルゴリズム・実装技術の研究ばかりなく，ユーザー・インターフェースの研究にまで広げてゆかなければならない時期がきていると思います．

日立製作所基礎研究所　丹羽　清

7月号の特集「教育とOR」のなかで，戸塚滝登氏の「Logoと子供たち」に感銘をうけました．

まず第1に，問題を発見し，定式化し，理解するというOR（だけでなく科学）の原点が，ああ，ここにあるのだという思いがしました．第2に，コンピュータに使われず，コンピュータを使うということが，こういうことなのだと教えられました．第3に，先生の子供たちに

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．

対するあたたかい眼(…これが教育の基本だと思います)が感じられ，こういう学校，こういう先生が本当にいたのだということがわかった喜びです．

東京工業大学経営工学科　木嶋　恭一

昨年9月から1年程英国北西部にあるランカスター大学・システム学科で，当学科のチェックランド教授らにより開発されたソフトシステム方法論を勉強してきました．これは，従来のシステム工学をそのまま経営の現実的状況に適用するのは不適切であるという経験と反省にもとづいて考案された方法論です．一方，英国のORは日本，アメリカのそれと呼称が異なるだけでなく，複雑な問題状況の解決のプロセス全体を考察対象とするため必ずしも数学的モデリングにはこだわらないように思われます．したがって，ソフトシステム方法論と同様の目的を有する方法論がORの分野でもいくつか提案されており，これらの比較考察は興味深いものとなりました．

さらに，ソフトシステム方法論の延長として組織内の情報システム構築・改善の手段として“情報システム分析”が最近開発提唱されており，これも興味深いと思いました．今後は，システム概念自身の研究と，その経営意思決定への応用との橋わたしが研究テーマの大きな部分になると感じているこのごろです．

大分大学工学部組織工学科　栗原　孝次

私は計算機統計学を研究対象とし，統計ソフトウェアに興味を持っています．特に，現象解明等のためにデータ解析を行なう場合，情報（データ），解析方法（方法論），解析者の3つの要素がありますが，これらの要素に対する計算機を用いた接近法に注目しています．現在，解析者の専門的知識についてはエキスパートシステムとして財務・医療の診断等で実用化され，また，計算機を用いた妥当性を評価する新しい展開手法としてBootstrap法等の手法があげられます．しかし，単純な場合を除き，3つの要素は絡み合って独立に取り扱えないため，さまざまな困難が生じてきます．これが計算機を用い自動的にデータ解析が行なえない1つの原因となっています．しかし，当初実用化が困難とされた日本語ワープロは日本語・辞書の研究，記憶量の増大等のソフト・ハードウェアの面の発展により現在は至る所で使われています．同時に，バイオコンピュータや再び注目されはじめたアナログコンピュータ等のハードウェアを用い，データの診断，モデルの仮定・診断，データの解析，結果の解釈等を行なう思考機能を持つ自動データ解析システムを作成できるのも近いと研究活動を続けています．

編集後記▶暑い夏もようやく終わり，“天高く，馬肥ゆる”秋がやってきました．本号が皆様のお手元に届くころには，OR学会秋季研究発表会も無事終了し，秋の夜長に次の論文の構想を練っていらっしゃる方もおられると思います▶秋はスポーツの季節でもあります．先日ゲートボール大会に出場しましたが，やはり日々の練習とそして何よりも戦略が重要であることを痛感いたしました．ゲートボールのORなども今後研究する余地はありそうです▶「モジュールとユニット」お楽しみいただけたでしょうか．標準化されたモジュールからシステムを構築するという発想は，たとえば，ノイマンのセル・オートマトンにもみることができます．そこでは，モジュールの大海の中を泳ぎながら，みずからを組織化していく自己組織系のアイデアが提出されています▶このように，システムをモジュールの結合という観点でとらえると，どのようなモジュールを用いて，どのように組織化していくのかということが，よりよいシステムを設計するときの要点となります．今後とも本誌を充実させてゆくために皆様の積極的なご参加により，モジュールの大海を発展させてゆきたいと思っております．（J）

オペレーションズ・リサーチ

昭和61年10月号　第31巻（新シリーズ第11巻）10号　通巻309号
代表者　吉山博吉
発行所　社団法人　日本オペレーションズ・リサーチ学会
東京都文京区弥生2—4—16　学会センタービル
（電話　03-815-3351～2）〒113
編集人　柳井　浩
発売所　株式会社　日科技連出版社
東京都渋谷区千駄ヶ谷5—4—2　〒151

• 本誌のご注文は直接
日本オペレーションズ・リサーチ学会へ　定価　850円（郵送料含）年間予約購読料 9600円（郵送料含）
• 本誌への広告お申し込みは明報社（571-2548），日経弘報社（563-2241）へ

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．